

応募にあたって知っておいて欲しいこと

応募にあたっては、所属先(地方競馬場の厩舎)を決めてからでも、あるいは決まっていなくても構いません。しかし、大切な人生の目標としてこれから進む道ですので、**競馬社会を良く理解**して応募して下さい。

1 騎手という職業

騎手は、プロのスポーツ選手です。2年間でプロの道を目指し、フェアでプレーする精神を身につけます。馬に騎乗する技術だけではなく、公正に実施される競馬のルール、規則を守れる人間でなければ騎手にはなれません。また、馬に乗る職業ですが、競馬社会の人と人との仕事でもあります。挨拶や礼儀礼節、上下関係等、今までの生活よりもずっと厳しくなります。そういった社会に身を置き、日々精進し続けることができる人が勝ち残っていける世界です。

2 体重調整

騎手にとって体重を調整することは最も重要なことの一つです。当センターでは教育期間中、個人差はありますが2～4 kg増加しますので、各々の騎手候補生に対し、年齢区分毎に規定体重を指定し、修了時の規定体重 49.0 kgに設定しています。

騎手候補生は、栄養管理された毎日の食事以外に、自主的に体を動かし、プロの騎手として通用する体づくりを目指しています。

3 候補生の1日の流れ

当センターの起床時間は午前5時半。午前中に3頭の実技訓練と、午後から騎手に必要な教養を得るため学科の授業があります。その内容は法規、馬術、馬学、調教、管理、衛生と多岐に渡り、プロスポーツ選手を目指すためメンタルトレーニングや、体の使い方を習得するためフィジカルトレーニング、武道(剣道)を通して礼儀作法を学びます。

4 修了生の感想文から(一部抜粋)

◆令和8年3月修了生

2年間を振り返ると1日1日が濃く人生の中でいちばん時間が経つのが遅く感じました。期待と不安が入り混じって迎えた入所式、その気持ちは一瞬にして絶望へと変わりました。何度もやり直しされる号令、喉が取れそうになるほど声を出した馬上体操、時間に追われる生活など、今まで体験したことのないつらさから初めて両親に電話した時には、言葉が詰まって泣きそうになったことを覚えています。しかしセンターでの2年間は楽しいことも多くありました。日光旅行やキャンプ、東京旅行など最高の同期と最高の先生方と行けた旅行は強く思い出に残っているし一生の宝物になりました。

赤帽時代には、基本馬術の重要性和難しさを感じました。計4回の技能審査を同期に絶対負けたくないという気持ちを持って臨み、お互い高めあうことができ自分を成長させてくれました。青帽になると徐々に競走訓練も始まり慣れない調教鞍での騎乗は緊張で身体が固くなっていました。同じ馬で何度も引っ掛かり嫌になるときもありましたが、その度

に馬に謝って上手くなるチャンスだととらえ毎日頑張りました。橙帽になると本格的な競走実習が始まりレースの楽しさと難しさを実感しました。競馬場実習を経て騎乗姿勢も安定するようになりました。人間性の面も競馬場でたくさんのかたちを経験し成長することができました。デビューしてからは常に謙虚さと感謝の気持ちを持って毎日全力で生きます。

◆令和8年3月修了生

地方競馬教養センターでは何度もやめたいと思いましたが、諦めず続けられたのも両親、同期、先生方のおかげです。

赤帽の頃は生活環境が大きく変わり毎日不安ばかりでした。生活時間を制限され日々怒られて精神的にも体力的にもボロボロでした。そんな時でも騎乗は唯一の救いでした。鎧を外したり、馬上体操があったりと辛かったですが馬に乗れる楽しさや上手に乗れた時など充足に感じました。技能審査が行われ、馬場馬術、障害馬術で上手く出来たり失敗したりどれも良い経験になりました。青帽になりだんだん訓練内容が難しくなり毎日ついていくのに精一杯でした。その後、那須トレでの障害大会に臨み良い走行をし、見事1位をとることができ本当に嬉しかったです。後日、JRA 対抗戦を行い総合点では引き分けで終わりましたが、負けたくない気持ちが強かったのでチーム一丸となって全力で頑張りました。青帽はとても長かったですが、いろいろな経験ができて良かったです。オレンジ帽になり走路馬がメインとなり、姿勢や馬との折り合いを大切にしながら乗ることを意識しました。競走訓練では馬のコントロールや追い込み操作の実力の無さを実感しました。競馬場実習が始まると、騎手、調教師、競馬関係者の方々に支えてもらい充実した競馬場実習を過ごすことができました。最後まで切磋琢磨を共にしてきた同期、一生懸命教えてくれた先生方にとっても感謝しています。